サポートぎふ 119

平成31年２月23日
発　　行
岐阜県知的障害者支援協会
広 報 委 員 会

巻頭言　　岐阜県知的障害者支援協会　会長　田口 道治

会員施設・事業所の皆さまには、日頃より当協会の事業に格別のご理解とご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

今年度は期中において、岐阜県委託事業に取り組むこととなりました。事業名は、『障がい者施設交流・地域生活支援拠点推進事業』です。地域生活支援拠点につきましては、在宅の障がい者に対して、日中活動等の体験の機会や相談支援、緊急時における短期の受入などにより、住み慣れた地域において安心のある生活を目指すものです。既に第４期、第５期の市町村障害福祉計画に掲げられてきましたが、まだその実現に至ってはいません。市町村や県内の各圏域において協議が進められていますが、相談や短期受入などの支援を提供する施設・事業所等にもその理解と実施が期待されているところです。同事業を受託し、当協会では有識者による講演会を 12 月に実施し、3 月には先進施設の視察研修を計画しています。もう一つ、期中に立ち上げられた特別の委員会として、第 57 回東海地区施設長等研究協議会の実行委員会があります。これは静岡、愛知、三重、岐阜４県の施設長・事業所長による研究協議会で、次年度は岐阜が当番県です。既に実行委員会を３回開催し、開催要綱案の骨子が固まりました。テーマは、「ライフステージに応じた切れ目のない支援を目指して」とし、開催期日は 2019 年 9 月 5 日（木)～6 日（金)、会場は「グランヴェール岐山」（岐阜市）です。中濃圏域の施設・事業所の管理者が実行委員となり準備が進められています。

さて、今年度は３年に一度の報酬改定で幕開けとなりましたが、驚くことに昨年 8 月 29 日には３年後の次期報酬改定に向けた検討が始められました。これまで改定実施年の前年に「障害福祉サービス等報酬改定検討チーム」が立ち上げられていました（平 30 改定は平成 29 年度）が、次期改定（平成 33 年度）の検討が平成 30 年 8 月に開始され、本年 31 年 2 月までに既に５回開催されています。検討内容は、「障害福祉サービス等に関する消費税の取扱い等について」、「障害福祉人材の処遇改善について」などとなっています。これに関連して、「生活介護のあり方に関する実態調査」や「障害者支援施設のあり方に関する実態調査」、「障害者の福祉的就労・日中活動サービスの質の向上のための研究」等々、各種の調査や研究がされています。この他、「障害児入所施設の在り方に関する検討会」も２月から始まっており、これらの動向を注視していく必要があります。

最後に、私たち施設・事業所における大きな課題の一つは人材の確保です。前号では、（公財）日本知的障害者福祉協会の求人ポータルサイト「知的障害者支援員おしごと.net」」について紹介しました。同協会ホームページには９月の運用開始から１月までの５ヶ月間の閲覧者等の運用状況分析結果が掲載されています。当支援協会におきましても、関心のある学生や転職を考えておられる人たち、あるいは地域の皆さまに各施設・事業所の紹介や支援の内容、仕事の楽しさをお伝えしていく方策を検討していくことが、今、求められていると考えています。

平成 30 年度全国知的障害者関係施設長等会議にて

平成 30 年 7 月 2 日～3 日、会場東京国際フォーラムにて全国知的障害者関係施設長等会議が開かれました。その際、会長賞受賞式が行われ、社会福祉法人たんぽぽ福祉会・恵那たんぽぽ地域療育支援センター　センター長並びに岐阜県知的障害者支援協会副会長を務めておられます**大西　鈴彦氏**が表彰されましたので、ここにご報告させて頂きます。

表彰理由

高校・大学時代におけるボランティア活動、また日本福祉大学で習得した専門的な知識を持って、半世紀近く知的障害者とかかわ、今なお岐阜県知的障害者支援協会の副会長、岐阜県相談支援特別アドバイザーとして、岐阜県内の知的障害者幸せに向け日々努力をされている。

また、社会福祉士として、岐阜県知的障害児者サポート協会成年後見センター後見担当委員として、県内の支援施設で生活している家族関係の薄い知的障害者のために成年後見についての相談を行うなど、施設で生活する知的障害者の幸せを守る為情熱を持って奔走されている。

地域における功績

高校生の頃から障害福祉に興味を持ち、知的障害者の福祉活動を行ってきた。

昭和 44 年に大学を卒業後、岐阜県福祉事業団向山学園に就職し、平成 25 年に県立ひまわりの丘地域生活支援センターを退職するまで、知的障害児、知的障害者、乳児院、身体障害者支援施設を含め、旺盛な熱意と情熱を持って障害者福祉に奔走した。

また、岐阜県知的障害者支援協会の部会長として、平成 12 年から入所更正部会長を 5 年務め平成 16 年からは相談支援部会の部会長として活動し現在に至る。そして平成 18 年からは岐阜県知的障害者支援協会副会長として会長を補佐し、要望・請願の活動、研修会の企画等、県下の支援施設を利用する知的障害を持った人たちの幸せを願った活動をしている。

平成 18 年には岐阜県相談支援特別アドバイザーとなり、県内の障害を持った人たち、関係機関、関係者へのアドバイザーとして現在も活躍している。

誠に、おめでとうございました。

社会福祉法人　至誠会　「ル・リアン」開設１周年 （施設紹介）

「ル・リアン」は平成 29 年 10 月、新設社会福祉法人「至誠会」最初の施設(事業所)として、岐阜市の西部地区、川部６丁目 60 番地で事業を開始しました。

行う事業は「生活介護」定員 15 名、「就労継続支援Ｂ型」定員 10 名の多機能型事業所になります。

法人名の『至誠』は「誠意を尽くして事にあたれば、どのようなことでも必ず動かすことができる。」という意味からなっています。また施設名(事業所名)『ル・リアン』は「絆」「繋がり」「縁」の意味があり、この場所から私達の願いの輪が広がっていくようにとの思いが込められています。

開設から１年余りが経ちました。すべてが整った状態でのスタートとはいきませんでしたが、困難を乗り越えていく過程で私達の願いとする施設の姿が、出来上がっていくものと思っています。そしてそれを実現するのは縁あって「ル・リアン」に集った、またこれからも集って来る利用者さんと、助け、支え合う私達自身の他を「思いやる心」です。

人々が互いを認め合う共生社会が実現できるそんな場になる施設づくりの第１歩を踏み出しました。

設置の目的に「知的障害を伴なった自閉症の人の支援」とありますので、その役割と機能は果たしていかなければなりません。

現在利用者の状態は様々ですが、障がいが違ってもそれぞれの共通する願いは同じです。

私達は施設の基本方針を『「働く」ことで人としての自己実現と、社会参画を成していく。』としました。それを共通する一致点として、利用者さんと一緒に前に進みたいと思います。

より一層のご理解とご支援をお願い申し上げて、開設１周年の「ル・リアン」紹介といたします。

社会福祉法人至誠会　障害福祉サービス事業所「ル・リアン」
施設長　　平下　博文

社会福祉法人　万灯会　「まさき園」（施設紹介）

羽島市正木町は市内北部に位置し、レンコンの産地でもあります。その一区画に今年度、社会福祉法人万灯会まさき園が開園しました。北向かいには平成 28 年に開校した羽島特別支援学校が見えます。まさき園は障害者サービス(生活介護事業所)、障害児サービス(児童発達支援・放課後等デイサービス事業所)を運営しています。

私どもの法人には生活介護事業所が４つあります。創設者である吉村幸雄は、「学校を卒業した後の働く場」を求め、羽島学園を設立しました。その後、双樹園が開所し双方ともはたらく環境を大切にしてきました。

今年で万灯会も 50 年を迎えました。法人をご利用していただいている利用者様も高齢の方々が増えてきました。支援者の予期せぬ場所での転倒事故などが増えました。支援者は安心、安全に過ごしていただけているだろうか？と考え、検討を重ね対応をしてきましたが支援者だけの配慮では行き届かないことが多くなってきていました。

前述のような現状から、高齢の利用者様や身体に障害をお持ちの方が、住み慣れた施設や地域で安心して生活できるようにと、介護に特化した生活介護を開所しました。身体の状況に合わせて入浴できるよう、機械浴・個浴・一般浴を取りそろえたことで、安全に入浴できるようになりました。トイレや訓練室等も手すりを取り付け、空間を広くすることで、車いす等でも安心して利用することができます。笑顔で生き生きと過ごすことができるよう、趣味活動や健康体操、おやつ作り、レクリエーション、季節の催し等の活動を行い、職員も共に楽しんでいます。

平成 28 年に羽島特別支援学校が開校しました。法人でも障害児サービスの受け皿になれるよう準備が始まりました。特別支援学校の開校に伴い放課後等デイサービスにっこり羽島が開所しました。まさき園では一層障害児サービスの充実に向けて、学齢期前までのお子様が活動する場なる児童発達支援事業所・放課後等デイサービスを開所しました。児童発達支援ではクラスを設け、小グループで活動し、お子様同士で育む場にもなっています。身体を使ったあそびを主に活動に取り入れ、からだ、こころの成長が育めるように活動しています。放課後等デイサービスでは、羽島特別支援学校や市内の特別支援学級の子供たちが様々な経験、体験のできる活動を取り入れ、職員と共に楽しみながら過ごし、ひとりひとりの成長を見守っています。

社会福祉法人万灯会　「まさき園」
施設長　平井　崇広
〒501-6224　岐阜県羽島市正木町大浦 445 番地　℡058-372-5580

平成 30 年 11 月 7 日に社会福祉法人慈光会　高山山ゆり園にて第２回障害者支援施設部会と第２回日中活動支援部会が併行して行われ、午前中は２部会合同で施設紹介や施設・宇津江ホーム見学をしました。

今回は、日中活動支援部会より後藤悦子部会長のご報告をさせて頂きます。

一般社団法人岐阜県知的障害者支援協会 日中活動支援部会報告

岐阜県の日中活動支援部会では、利用者主体のサービスを実現するための支援のあり方や援助技術の向上、地域生活支援の推進などを目指し、「より良い日中活動を目指して」をテーマに現場で利用者さんと直接向き合っている生活支援員の方を中心に、日中活動について様々な角度から情報交換し研修を実施しています。

両部会長の進行

平成 30 年 11 月 7 日に第２回の部会を、高山山ゆり園で行いました。当日は、支援施設部会も同所で開催されていたため、午前中は、合同で「高山やまゆり園」「宇津江ホーム」の見学をしました。高山やまゆり園、宇津江ホームともに、木の暖かさが随所に感じられました。また、とことん利用者の立場になって設計されており、暖かさに加えて優しさも溢れる心休まる場所でした。部会参加者から、「この生活の場において、利用者の皆さんが感情豊かに表現できるような生活が出来ていくのだろうと感じました。」との感想が聞かれました。ゆっくりじっくり時間を取りお話をしてくださった職員の皆さんに心から感謝致します。

午後からは、「より良い日中活動を目指して～困難事例から学ぶ～」のテーマで部会を行いました。４つのグループに分かれ、各自持ち寄った今直面している困難事例を発表しあいその中から１つに絞り、グループメンバーからの質問を通して、事例の背景と課題を明らかにし、対応を考えグループで話し合いました。グループで話し合うことで様々な角度から物事を捉えることが出来たようで、どのグループも白熱した話し合いが行われていました。話し合いの発表から、共通して挙げられた事は「利用者の立場にたって、利用者の思いに寄り添い、願い思いを知る」という共感的理解であり、支援の基本は意思決定支援であることを学びました。また、「我々が現場に立てば、無意識の力が発揮されるから、くよくよ考えないで現場を詳しく楽しく見ましょう。」と積極的な意見があがり、参加者してくださった皆さんにやる気と元気を与える事ができた部会になりました。

部　会　の　様　子

宇津江ホーム見学風景

第１６回岐阜県障害者スポーツ大会秋大会

ドリームスポーツ大会の開催

第 16 回岐阜県障害者スポーツ大会秋大会・ドリームスポーツ大会（通称：ドリスポ）は、平成 30 年 9 月 24 日（月・秋分の日の振替休日）、岐阜メモリアルセンターを会場に開催されました。

本大会は、三つの会場（長良川競技場、で愛ドーム、ふれ愛ドーム）を同時に借り上げる必要があり、そうした日程の都合上、今回は例年よりも三週間程早い時期での開催となりました。そのせいか、当日は、初秋とは言え、雨の日の開催で肌寒くさえ感じられた前年とは打って変わり、日中は明るい日差しによって、選手のみならず私たちスタッフまでも汗ばむほどの陽気となりました。

大会関係者としては、常に当日の天気の良し悪しが気に掛かるものです。特に陸上競技などでは、選手に良好なコンディションで競技してもらいたいとの思いがあります。大会が二年ぶりに青空の下で行われることとなり、安堵とも何とも言えぬ格別な思いを感じました。

当日の朝は、開会式に先立ち式典前演技（余興）として、**「ぎふの森学園」**（発達障害児の音楽療法等の支援を行っている。）の皆さんによる楽器演奏があり、式典を盛り上げていただきました。長良川競技場の“フィールド”に整列した選手たち皆が、これから始まるであろう競技のこともひと時の間忘れ、フルートなど本物の美しい音色に聞き入っていました。

開会式も、大会会長である県障害者スポーツ協会岡本会長のあいさつなど滞りなく進み、式典終了後に、選手はそれぞれの会場に分かれ、競技が開始されました。

まず、長良川競技場の“トラック”で行われた**「陸上競技」**（選手 252 名）では、「25ｍ走」（５R、22 名）、「50m 走」（16R、95 名）「100m 走」（14R、75 名）、「800m 走」（３R、16 名）、「４×100m リレー」（２R、11T44 名）の各種目で熱戦が繰り広げられ、声援を送られるご家族や観客の皆さんなど、その場にいた全ての人々が、大きな元気と感動を選手と一緒に共有できたように思います。

同じく長良川競技場の“フィールド”では、**「フライングディスク」**（選手 366 名）が行われ、５ｍ先のリング状のゴールの通過数を競う「アキュラシー」（21 組 194 名）と、飛距離を競う「ディスタンス」（20 組 172 名）の２種目で、選手の皆さんは日頃磨いたスローイングの技術を競う方もいれば、自分なりのスタイルで楽しんでおられる方もいて、会場は常に明るい声や笑顔に包まれていました。

で愛ドームの「団体競技」（選手約 580 名）の会場では、「大玉転がし」（13 施設 21 組）、「綱引き」（７施設 11 組）、「玉入れ」（15 施設 13 組）の３種目が行われました。団体競技の参加チームはその殆どが当知的障害者支援協会会員施設からの参加であり、施設によっては同じ種目に三つものチームを出場させているところもありました。どのチームも毎年手合わせする、いずれも好敵手揃いで、参加した選手たちは競技を楽しみながらも、それぞれの施設の意地と意地のぶつかり合い、優勝を目指した激しくも熱い戦いを繰り広げていました。

ふれ愛ドームでは、大会参加者全員が自由に参加できる**「ふれあいラリー」**が行われました。スタンプラリーコーナーでは、「輪投げ」、「ボウリング」、「ストラックアウト」、「ミニサッカー」のゲームが楽しめ、参加者はカードにそれぞれ通過スタンプを押してもらい、４つのスタンプが揃うと、景品がもらえる仕組みになっています。他にも、貸し出し遊具コーナーが設けられており、フリスビーやバトミントンなどが貸し出してもらえます。約 200 人がゲームを楽しんでおられましたが、雨で長良川競技場“雨天走路”（屋内）の狭い場所で実施された前回と比べ、あまり参加者が増えていないことは少し残念なことでした。

今回の**「バザー」**は 12 施設テント 20 張り（うち支援協会会員施設は５施設テント 13 張り）の出店があり、前年と比べ３施設テント４張りの増となりました。参加者の方には予めバザー購入券(300 円分)が配布されていて、皆さんそれぞれに買い物を楽しまれたようですが、ある出店者の方の話では、「去年に比べると売り上げはイマイチ。」とのことでした。

売り上げが落ちた原因を探ってみると、「参加者が減ったからではないか」というところに行き当たります。実は、事務局による大会参加者募集の段階で、一部の特別支援学校に案内が届いていないことが判明し、急遽追加募集が行われましたが、大会の開催が例年よりかなり早い日程だったということも相まって、参加を見合わせた学校が何校かあったということでした。

特に例年、陸上競技とフライングディスクに特別支援学校のエントリーが集中するのですが、15 回大会では９校の参加だったのに対し、16 回大会では僅か４校（うち追加エントリーが２校）の参加に留まっているのです。このため陸上競技では選手が前年比約 100 人の減、フライングディスクは同じく約 120 人の減と、合わせて約 220 人が減っているという結果でした。

次回第 17 回大会の開催日程について大会事務局に問い合わせたところ、岐阜メモリアルセンターで実施される他のイベントとの関係から、2019 年は 11 月 10 日（日）に開催の予定とのことでした。次回はかなり遅い時期での開催となりますが、その分、今回のような不手際が無いようしっかりと準備し、万全の状態で大会に臨みたいと思っています。

いよいよ東京オリンピック・パラリンピック 2020 の開催が目前に迫り、世間一般の障害者スポーツに対する関心も高まってくるのではないかと思われます。我がドリスポもこうした機運に乗り、次回大会をさらに盛り上げ、発展させていくためにも、支援協会会員施設の皆さんのさらなるご理解、ご支援、ご参加を心よりお待ち申し上げております。

最後になりますが、このドリスポの実行委員会（46 名）は、実行委員長（平下博文支援協会副会長）以下、その殆どが支援協会行事委員会の委員を中心とした会員施設の職員の皆さんで占められております。大会を通じ陰で支える存在である皆さんの献身に対し、この紙面をお借りして、心より感謝申し上げたいと思います。

岐阜県知的障害者支援協会　行事委員会　委員長　　日野恵光　所長　安田　一信